



きっかけは「インディーズ候補」

前田 『NO 選挙, NO LIFE』では、二〇二二年七月の参議院選挙を取材する畠山さんに密着し、その後の沖縄知事選やご家族への取材も含めると期間は一年弱に及び、お世話になりました。

畠山 前田さんと最初に会ったのは、二〇二〇年六月にあった『なぜ君は総理大臣になれるのか』の試写会でしたよね。

前田 私は立憲民主党の小川淳也さんを追ったドキュメンタリー『なぜ君は総理大臣にならないのか』の制作にプロデューサーとしてたずさわっていました。

選挙を二十数年も取材し続けている畠山さんの仕事は知っていました。会ったあと、著書を改めて読んで感銘を受けました。選挙ってこんなに豊かで奥深いのか、と。それで畠山さんに密着すれば、私がまだ気づいていない選挙の魅力を記録できるのではないかと思っただけです。何よりもすべてを投げ打って長年、選挙を追いつける畠山さんの生き方に興味がありません。

畠山 選挙取材を始めて二十五年になりますが、選挙にハマったきっかけは偶然です。学生時代、大学の先輩である編集プロダクションの社長と知り合い、取材や執筆、編集を手伝うようになりました。アルバイトとはいえ、実態は丁稚奉公で、どんなに働いても毎月三万円しかもらえませんでした。これじゃ食えない。

どうしようかと悩んでいると、編プロの社長の知人が選挙に出るといふ話になったんです。選挙カーの運転やアナウンスをして選挙運動を手伝うと、日当が一万五千円も出ると聞いて「やります、やります!」と手を挙げました。選挙事務所に出入りしてみると、これが想像以上に面白い。老若男女、世代も立場も違う人が出入りしていました。何をしているか分からない怪しい人や、見るからにいかかわりそうな人もいる。このカオスな空間は一体なんなんだと惹かれていったんです。

前田 選挙を取材するようになったのは、週刊誌で働き始めてからと言っていましたよね。

畠山 そうです。私が若い頃に出入りしていた『週刊プレイボーイ』の編集部では、毎週月曜日に企画会議が開かれていました。企画を提案するために、月曜日

の朝刊をくまなく読むのが習慣になりました。すると前日に行われた選挙の結果や告示された選挙の候補者一覧が掲載されている。それで、選挙をテーマにした企画を頻繁に提案していました。

でも、企画がなかなか通らない。知事選と参議院選挙の選挙期間は十七日ですが、衆議院議員選挙は十二日です。市町村選挙や地方議会の選挙はもっと短くて、五日から一週間。「結果が分からないうちに取材して書いた原稿が、結果が出た後に店頭に並ぶ」というのは週刊誌として致命的で、選挙は決定的に雑誌に向かないテーマでした。

そんななかでも本格的に選挙取材を続けられるきっかけになったのは、芸人の大川豊総裁でした。大川興業の大川総裁は、政党や組織の支援を受けない候補者を「インディーズ候補」と呼んでいました。インディーズ候補に関心を持った編集者が大川総裁の連載を企画し、毎回しつこく選挙企画を提案する「変わったライター」と認知されていたが、大川総裁と一緒にインディーズ候補に会いに行くようになったんです。

前田 インディーズ候補は、一般的に「泡沫候補」と呼ばれています。畠山さんの言葉を借りれば「無頼系